

その後、頭家の奥方も従者の八重野も八郎が呼び続けたという場所で、哀れにも命を断ったという。村びとは、これを悲しい物語として語り伝え、ここに「呼ばり石」として六百年、赤い夕陽が西の方から斜めに、この大石を静かに照らすとき、いまもこの「呼ばり石」は、人々に悲しく何かを語りかけてくるようである。

